

「寿岳文章先生、和紙文化国際化への貢献」

和紙造形作家 伊部京子

1900年生まれの寿岳文章は、近代和紙研究啓蒙の嚆矢の人であった。英文学者、書誌学者などいくつもの顔をもつ知の巨人であったが、終生和紙を愛し、工業化の進展とともに漸減の一途をたどっていた和紙の復権に貢献し続けた。

寿岳の和紙への関与を年代的に見ていくと、初めて和紙を使い刊行したのが、1931年の雑誌『ブレイクとホキットマン』であった。この雑誌はブレイクの研究者であり民芸運動の創始者である柳宗悦の発案依頼によるものであり、寿岳は柳のウィリアム・ブレイク百年忌記念の展覧会開催、『キルヤム・ブレイク書誌』の出版にも参画していた。

寿岳は1922年、ブレイク研究のために柳を東京に訪ね、1923年、柳が京都に移住してから親交を深め、民芸運動に深くかかわるようになっていく。

新村出への師事も同じころで、柳、新村は寿岳の和紙研究啓蒙に積極的にかかわり、終生、支援し続けた。柳も寿岳も和紙を研究の対象とするだけではなく、和紙を慈しみ、生産現場に足しげく通い、洋紙との価格競争で疲弊していく和紙の産地に目を向けて、その復権に情熱をもって臨んだ。西洋式の印刷術に見合った和紙を産地と協力して開発し、率先して使い、消費を喚起しようと努めた。柳は寿岳に先んじて1922年すでに和紙を使った三冊の書籍を出版し、1931年創刊の雑誌『工藝』は和紙を用紙として刊行した。ブレイク、英文学の部分で柳という国際派の知識人と分かち合っていたことが、寿岳の和紙啓蒙活動を方向づけたと思われる。

1929年、ハーバード大学の日本文化研究者ラングストン・ウォーナー博士が来日、柳はその招聘で渡米し、ハーバード大学の理事であるカール・ケラーと出会い、ドン・キホーテの日本語の本の収集依頼を、寿岳に取り次ぐ。それが後に芹澤銈介の挿絵による稀覯本『絵本どんきほうて』の出版として結実することとなる。1930年までの寿岳は柳に触発されて、和紙啓蒙の活動範囲を海外へも広げはじめた時期であったとみることができる。

寿岳に今一人終生のロールモデルとなる人物があった。それはアメリカの手漉き紙研究家、アーツ・アンド・クラフツのデザイナーであり、私家版の制作者ダード・ハンターであった。寿岳がいつハンターの活動に注目し始めたかは記録からたどることはできない。1883年生まれのハンターは1930年代までにすでに紙のみならず、フォントまでを自作した優れた私家版発行で高く評価されていた。先に挙げたカール・ケラーはハンターの私家版を愛し、限定本の早い番号を入手することに情熱を燃やしていたということなので、柳を通しての関係であったかもしれないと私は推察する。

ハンターとは文通していたことを寿岳は語っているが、日本への旅について書いている「紙とともに生きて」には寿岳との出会いについての記述はない。筆者はアトランタ・ジョージア工科大学付属の Robert Williams American Museum of Papermaking で、ダード・ハンターの収集した資料の中から、寿岳文章との出会いに関する記録を探したが、限られた時間で見つけることはできな

かった。

ダード・ハンターの伝記 *By his own Labor* の著者キャサリン・ペーカーは、ダード・ハンターの孫の招きで、Mountain House で、手つかずのまま、何万点もの資料が保管されていたことを知ることになった。それらの整理に1992年以降取り組み、2000年に伝記を出版した。向日庵にはハンターからの手紙は残されていないが、Mountain House の資料に壽岳文章からの手紙が含まれているに違いない。

ダード・ハンターは1933年 *Papermaking Pilgrimage, Japan, Korea and China* 執筆のため来日し、壽岳とは京都で1日を共にした。その感動を壽岳は「あのハンター」と感嘆を込めて記録している。この年壽岳は向日市の新居向日庵へ移り住み、向日庵本の出版、「向日庵消息」を発行し始めた。同年、『工藝』28号が和紙を特集し、柳が「和紙の美」、壽岳が「和紙復興」を書き、和紙啓蒙を高らかに謳い上げた。

1937年、今一人の師、新村出と図りあい、和紙研究会を組織し、雑誌『和紙研究』を創刊した。同年新村の推薦で有栖川奨学金を受給し、3年にわたる紙漉き村旅日記の現地調査に取り掛かった。私家版刊行、調査旅行にもとづく出版ともに、ダード・ハンターが世界規模で実施してきたところであった。英文学者でもある壽岳が和紙の海外での評価を熟知し、和紙の海外への紹介を念頭に置いていたことは疑いえない。1942年、*Hand-made Paper of Japan* を Tourist Library から出版した。

戦後 外国人来日が盛んになるに従い、和紙に興味をもって壽岳を訪ねる外国人が輩出した。アメリカではダード・ハンターの影響下、直接日本で手漉き紙を体験した戦後世代によって、アメリカでも手漉き紙への関心が高まり、新しい芸術の領域として、手漉き紙に注目する芸術家が輩出し始めた。ダード・ハンター第2世代によるこの活動は手漉き紙のルネサンスと呼ばれ、世界へと広がっていくことになった。

1970年代に入ると、こうした芸術家たちが、技術研修と情報交換のために、会議を開き、日本の手漉き紙の匠がアメリカに招聘され技を披露する直接交流が始まった。

1978年には、あらゆる工芸を縦断して、世界のものづくりが集う「世界クラフト会議 (WORLD CRAFT COUNCIL '78 KYOTO 通称 WCC KYOTO '78)」が開催され、和紙は日本の誇る一部門としてプログラムを実施した。当時は紙以外の他ジャンルの伝統工芸に新しい造形手法を導入することが盛んで、陶芸、織染工芸などが、日本のお家芸として世界から注目されていた。WCC は日本の伝統工芸にとっての黒船だと言われたが、和紙の世界はまさに鎖国下の日本のように、伝統工芸の一分野として海外の動向とは無縁のままであった。そうしたところに海外の紙を素材とした斬新な作品と芸術家が大挙して紹介され、関係者に大きな衝撃を与えた。和紙の国際化はこのようにして始まり、産地と海外の芸術家、研究者との熱い交流が始まった。

壽岳文章が創刊し、1951年の第15号で休刊となっていた『和紙研究』が、壽岳の和紙研究を支えた森田康孝により復刊された。森田と当時文化庁の技官であった柳橋真とが壽岳の次世代の和紙啓蒙の担い手として産地への関与を深めていった。若手の育成と情報交換のため、全国に点在する手漉き和紙後継者に呼びかけ、手漉き和紙青年の集いを開催した。

1980年には、アメリカでタパ (Tapa 樹皮紙) と和紙の情報交換の会議が開催され、青年の集い

のメンバーがグループで参加し、アメリカでの動向を体験し、日本での会議開催を託されて帰国した。産地の若手を、京都での WCC の成功で生まれた産官学の連携組織が支え、1983 年、「国際紙会議'83 京都 (International Paper Conference'83 KYOTO 通称 IPC)」が開催された。

海外から 260 名、日本から 250 名の参加者があったこの会議によって、手漉き紙にかかわる文化活動は一挙に世界へと伝播することになったのである。

来日から 50 年、そして、ハンター生誕 100 年目の記念すべき年に、ハンター第 2 世代によって開催されたこの会議は、画期的なイベントとしていまでも語り継がれている。この会議に触発され、海外との交流で活路を見出そうという産地の若手が海外へとでかけ、また海外から和紙の産地に研修に訪れ、長らく滞在するケースもまれではなくなってきた。戦前には考えられなかったことが和紙産地の日常となったのである。晩年の壽岳文章は実行委員会の参与として、和紙業界のシンボリックな役割を担ったのである。日本での会議開催前後して、関係者の連携による組織が世界で発足した。

1981 年、ハンターの集めた世界の紙漉きにかかわる資料を収蔵するジョージア工科大学付属アメリカ製紙博物館 (通称ダード・ハンターミュージアム) を拠点として、“Friends of Dard Hunter” が結成され、現在も発展し続けている。

ヨーロッパでは世界組織である「IAPMA (International Association of Hand Papermakers and Paper Artists)」が 1986 年に結成された。2 年ごとに世界持ち回りで年次総会を開催していて、1995 年に京都で日本紙アカデミー主催の国際会議が開催された際、京都で同時に年次総会を開催した。2020 年には豊田市がホストとなり、再度日本での開催が決定している。

手漉き紙にかかわる国際交流が活発になるに従い、海外からの要請にこたえるため、1988 年に日本紙アカデミーが設立され、壽岳文章は名誉会員として参画した。会長を務めた壽岳の共同研究者であった町田誠之は日本紙アカデミーの精神と雰囲気は壽岳文章の和紙研究会をおよそ継承していると述べている。

壽岳文章が和紙に深く関与し始めた時からすでに 100 年近い年月が経過している。その 100 年は手作業でつられる和紙が機械生産の洋紙に次々にとってかわられる受難の時代であった。紙の生産は近代までは手作りであったことに洋の東西を問うものではない。機械紙の生産が始まると次第に手漉きにとってかわられた。しかし日本ほど、手づくりの紙が生産され続けている国はほかにない。IPC 以降日本でも和紙を基盤とした造形を手掛ける若手が輩出し、世界的なネットワークで活躍するケースも珍しくない。

和紙が今日あるのは、生産者の努力と相まって、官民ともに保存のためのさまざまな対策が講じられてきたからに他ならないが、壽岳文章の和紙復興にかけたさまざまな活動が和紙を洋紙とは違った特別に尊いものという認識を広め、日常的にそうした思いを共有できる文化基盤があることによるところが大きい。その価値は国内だけでなく、海外にも多くの美術工芸品に姿を変えて輸出され、海外の多くの美術館で収蔵されている。支持体としての和紙があったからこそその美術工芸であり、和紙の生産が続かなければ、そうした美術品もいずれは存続し得なくなるのだ。和紙の存在意義はここでも国際的に考えなければならぬところなのだ。

依然として和紙の生産現場での厳しさは改善されたわけではないが、和紙を愛する気持が共感を呼んで、多くの人々が産地を訪れる今日の状況は日本以外ではありえない。

和紙を基盤としたポスト IPC 世代の芸術家の活動も新しい活力を産地に吹き込んでいる。国際紙会議で和紙の国際化が一気に加速する前年に、壽岳文章は和紙の将来は国際化のなかでの展望を持つことであると語った。和紙復興を謳いあげてから 50 年後の壽岳の示唆するところはそれからの 50 年の方向を示す、羅針盤であったといえるだろう。

1933 年が和紙復興の起点であったとすれば、1983 年が国際化の起点であったとみることができる。その間 50 年、和紙啓蒙の中核を担い続け、なかでも、国際的な視点で和紙の未来を拓くことを提唱したのは、壽岳ならではの視座として、特筆に値する。